

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 東京や大阪といった日本の大都市が、世界的に見ても清潔で安全な街であることは誰もが認めている。しかし、そこに生活する人々の顔に、経済大国に見合った豊かさを享受するという、悠揚とした落ち着きは感じられない。また、それら生活関連のユーティリティの充実が、少なくともイギリスでは、すでに一世紀半も前に着手され、今世紀初頭にはほぼ完成していたことを考えれば、日本の近代化が民びとの暮らしを埒外に置いて進められてきたことは明らかだ。いや、ことは国家の問題ばかりでなく、それを許してきたわれわれ個人の問題としても捉え直さなければならないということだろう。

② ヨーロッパの近代的精神を終始一貫して支え、かつタイゲンしてきたのは個としての人間であった。人間が個として自立することによって、合理主義も、またそれにもとづく科学技術の形成も可能となった。そして、そうした個人を根底で支持していたのが、一神教的な色彩のきわめてノウコウな「理性」であった。理性こそが人間を人間たらしめている所以であり、絶対に誤りを犯すことのない無謬性をもつものと考えられたのである。しかし、理性をあまりにも中心に置きすぎたために、かえって窮屈な状況を招来したことも事実である。いわゆる超常現象や心霊現象など科学的に説明できない現象を排除したり、伝統や慣習など非

問六 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ オーストラリアの原住民は、ワニと人間を同じ仲間と考えるほど非理性的であり、文明化は難しい。

ロ タスマニア人は「木」にあたることはこそ持たないが、われわれと同様の「木」という抽象的な概念は持っている。

ハ 一匹の白い牛を見る見方は、「白いウシ」を指すことばを持つズールー族の方が、それを持たないわれわれより正確である。

ニ チェロキー族は洗うことに関して、われわれと異なる抽象の意味世界をもち、現実の把握の仕方も異なっている。

ホ 文化の違いに応じてものの見方は異なるのだから、科学の世界の斉一化した事象の区分はまちがっている。

○ 同じ木を同じことばで呼んでも、歴史や文化の培ったことばの意味合いには大きな違いが生じるから。

ハ サクラということばで呼ばれる植物自体が異なるため、物の見方に異質な枠組みが生じているから。

ニ 同じ木を同じことばで呼び、意味まで統一しても、花見の習慣の統一まではまだ達成されていないから。

ホ サクラということばは同じでも、それが組みこまれてある言語体系には文法や発音など大きな違いがあるから。

〔出典〕
山本雅男
『イギリスの訓え』

〔著者出題歴〕
・立教大学
・法政大学
・日本女子大学

害 理性

2

合理的要素の多いものを後景に追いやりたりするのは、その一例である。△がそれは明らかに理性の横暴であり、エッセンである。近代の合理主義、もつと言うなら、近代という時代そのものには大いなる行きすぎがあった。帝国主義や社会主義による国家の膨張も、科学技術の急伸による地球環境の抑圧も、行きすぎの一半をなしている。じつは、同じように個人も行きすぎの憂き目にあっていると思われる節がある。

③ ロンドンは公園の多い街である。数が多いだけではない。それぞれがひじょうに広々としている。公共空間の一人あたりの面積が東京の約十倍という数字もあるくらいなのである。それはともかく、子供たちが公園に遊ぶ様子はどこも同じ△が、老人の孤独そうな姿をそちこちに見かけるのは日本と違っている。大きな木製のベンチにぼつんと腰かけ、近づいてくるハトやリスに皺くちやになった紙袋からパン屑などをやる光景は、ほのぼのとしている反面、どこか寂しげでもある。核家族が当たり前になっているイギリスでは、二世・三世が一緒に住むことは稀であり、また、老人同士がゲート・ボールなどして打ち興じることもあまり見ない。ヨーロッパにおいて、孤独が哲学的にも、日常倫理的にもシンケンでかつ永いあいだのテーマとなってきたのは、けっして故なきことではない。かれらは、子供の頃から、毎日の生活のなかで、それをしっかり受けとめ、噛みしめているのである。子供や老人といった社会的弱者が家族のなかで手厚く護られ

ている日本とはわけが違うのである。△がその一方で、公園でときを過ごす老人たちには、おそらく、そうした陰鬱な想いはないにちがいない。そもそものはじめから、依るすべを他者に求めていないからだ。そしてなによりも、生きる自由をまず第一に考えているからである。

④ アメリカやヨーロッパをよく知る人々が日本にいて感じる窮屈さ、当地に行っている解放感は、そうした個人の自由と関わりがある。それを同一性のかの不快、多様性のなかの安らぎと表現してもよい。その意味で、個はまさに多様性の象徴なのである。街のザットウに出るたび、よくぞ神は委曲をつくし、人の姿・形をかくも多彩に作りしものよと感じ入る。それなのに、一皮むけば、いつまでたっても同質社会と言われ、それに満更でもない感情をもつのはどうしてなのだろうか。同質であることを強いる、眼に見えず張りめぐらされた網が、不自由さを生み出している。とはいっても、行きすぎた自律によって人間同士が紐帯を失った個人に、今の日本人が耐えていかれるとも思えない。家族や共同体といった人間の絆を維持しつつ個人の自律と自由を拡大するような、ヨーロッパ近代型のモデルとは異なる、われわれ独自の座標軸を模索する必要があるだろう。

⑤ イギリスは、かつては大英帝国と言われ、物資が巷に溢れた時期があったものの、いまではそれも色褪せている。△が、人々の堅実で質素な暮らしのなかには豊潤な奥行きが感じられる。それは、多様性に対する許容と自分自身への

頑固なまでの自信が暮らしに現れているからだ。豊かな暮らしとは、物の豊かさを物質的な条件としながらも、それだけで事足りるものではない。目先のきらびやかな物の多様さに眼を奪われ、己が自身、個人の内面に眼が注がれないとしたら、いつまでも不思議は解消されないだろう。たしかに日本は後発の成金かもしれない。街には成上がり（くまぎ）を擦る仕掛けが溢れている。だがもうそろそろ虚飾（くすし）に惑わされない実質の価値を見出してもよいころ合いだろう。イギリス人の生活は、いまなお、いや今後も自分のあいだ、われわれの手本となるに違いない。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に改めよ。

a	b	c	d	e
---	---	---	---	---

問二 傍線部 1 〇に生活する人々の顔に……感じられない」とあるが、このように見方の前提には、筆者のどのような考えがあるのか。それを説明したものと最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 日本の近代化がイギリスに比べ一世紀以上遅れているという事実からもわかるように、日本の近代はヨーロッパ近代を乗り越えられない、という考え。

ロ 古い習慣など非合理的な要素が理性の伸長を阻害してきた社会において、個人の自立を確立するためには、伝統的な共同体を解体していくしかない、という考え。

ハ 日本の近代化が個人の暮らしを無視して進められたことを反省し、連帯を必要としない自立した個を尊重する、西欧近代的な生き方を実現すべきだ、という考え。

ニ 人間を人間たらしめるものが理性であることは疑いないが、理性をあまりにも重視することは、かえって窮屈な状況をもたらすことになる、という考え。

ホ いくら物質的に豊かになっても、個人を尊重しその多様性を受け容れようとする態度が身につかなければ、自信を持つて生きることが難しい、という考え。

問三 傍線部 2 「窮屈な状況」にあてはまらないものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 近代の人間があらゆる事象を合理的に説明しようとするようになったこと。
- ロ 科学技術の急速な進歩が、地球環境に重大な影響を与えるようになったこと。
- ハ 個人の自立が求められるあまり、人間同士のつながりが希薄になったこと。
- ×ニ ヨーロッパを知る人びとが、日本の社会で不快感を感じるようになったこと。
- ホ 西欧の老人たちの生き方が、どこか孤独で寂しげに見えるようになったこと。

問四 傍線部3「アメリカやヨーロッパをよく知る人々が日本にいて感じる窮屈さ」とあるが、このような「窮屈さ」が感じられるのは、日本の社会がどのような社会だからか。本文中の言葉を使って、二十字以内で答えよ。

問五 傍線部4「虚飾に惑わされない実質の価値」を見出すために、筆者は、われわれ日本人がどうするべきだと考えているか。それが述べられている一文を本文中から抜き出し、その最初の五字を答えよ。

近代科学の客観性

① 望遠鏡の発明は、宇宙の世界を知るうえで、実に ^a カッキテキな出来事だった。

② 確かに、ガリレオ以前の占星術師も、正確な距離を計測するための照準儀や、角度をただしく測るための四分儀などの計測器を利用していた。けれども、それらはいくまでも人間の視覚能力を補うための道具なのであって、観測は人間自身の能力にゆだねられていた。つまり観測は万人のものではなく、能力を授かった特殊な人の行う特別な営みだったのである。

③ しかし、望遠鏡の出現は事態を一変させてしまった。望遠鏡を天に向けたとき、特殊な能力を備えた者にも見えなかった天体の詳細な姿が、望遠鏡の機能によつて目の前に現れたのだ。天体のこの詳細な像は、肉眼では誰一人として見る**ことができず**、望遠鏡を**ノゾけば誰にでも見る**ことができたのだ**った**。

④ 望遠鏡は、見る者と対象との距離を近づける効用を、等しく私たちに提供してくれた。と同時に、望遠鏡は対象から観測者を遠ざけてしまった。望遠鏡が観測者を押しのけて、観測の主役に躍り出ることになった。観測者（主体）と対象（客体）との分離を科学者が自覚したときから、科学は独自の道を歩むようになったのである。①

⑤ 今世紀初頭の偉大な科学者であり科学思想家であつたシュレーディンガーは、